

れていなかった。しかし、本書は音楽実践者の自主独立的な活動こそが非民主的な法案につながったことを明らかにしている。

このように著者が序章で掲げた目的はすべて実証的な議論によって達成されていて、その意味で評者が批判すべき余地はない内容になっている。「ロック＝抵抗の音楽」というイメージに囚われていた筆者にとって、スハルト体制下から民主化後にまで続く、スポンサーとしての大手タバコ会社の大きな存在と、軍権力への依存構造を論じた節は、目から鱗が落ちるような思いで読み進めた。

「ポピュラー音楽と現代政治」という大きな課題にインディーズ関係者の「自立と依存の文化実践」に焦点を当てて取り組んだ著者が、たぶん意図的に取り上げなかった次の点を論じたい。現在のポピュラー音楽を論じるうえで欠かせないはずの音楽配信サービスとインターネット空間の存在が本書には登場しない。著者は2018年の大手CDショップの売り場の写真を掲載しているが、日本と同様にインドネシアでもSpotifyなどの音楽配信サービスを利用して音楽を楽しむ人が多数を占めている。Musicaなどメジャーな音楽会社にとってCD売り上げの落ち込みは深刻な打撃となるはずである。本書でおもに取り上げられているインディーズ系レーベルが配信サービスの普及をどのように受けとめられたのか興味深い。ジョグジャカルタで始まったインディーズ系ネットレーベルYNWを取り上げているが、配信サービスやYouTubeなど動画共有サイトが一般化するなかで、独自のネットレーベルの存在意義はどうなっ

ているのだろうか。私見では、配信サービスにおいて多様な音楽が検索可能な対象として並列化する現在、メジャーとインディーズという区別化が今後ますます縮小するように感じている。この点が、本書で取り上げられている音楽イベントやインドネシア音楽会議において、メジャーな音楽産業よりも、インディーズ系の音楽関係者のほうが表舞台において主要なアクターとして活躍していることとどのように関係するのか、興味深い問題である。ポピュラー音楽の「政治学」を論じるためには、音楽産業・市場の「経済学」も必要だと考える。

終章の最後は「音楽実践者たちの主体性はポピュラーカルチャーと民主主義の今後のあり方を規定してゆく。／未来はかれらの手の中にある。」(p. 298)と結ばれている。この文章にインドネシアの音楽関係者たちと深く関わってきた著者の真摯な思いが表われている。

伊谷樹一編、『つくる・つかう』（生態人類学は挑む4）京都大学学術出版会、2023年、306p.

八塚春名*

人と自然がどのようにつきあってきたのかを探究する生態人類学には、自然環境がいかに改変されようと、環境問題が深刻であろうと、人びとが、変動する環境とどのように向き合い暮らしているのかを解明することが求められる。本書は『生態人類学は挑む』シ

* 津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科

リーズ16冊のうちの1冊で、とくに生物資源の活用に着目したものである。

序において、現代社会で人が生態環境とともに生きていくためには「残しながら使う、作りながら使う」(p.3)という方法が必要だと論じられ、それに続く1～3章は「つかう」、4～6章は「置き換える」、7～9章は「つくる」というように、本書は3部構成になっている。「つくる・つかう」という一見するとモノを扱うと思わせるテーマでありながら、本書は一貫して、土地や景観、植物や燃料といった生態環境由来の資源に着眼点が据えられている。

「第1章 畑地利用のローカル戦略—樹木のある畑地景観のつくり方・つかい方」(大久保悟・徳岡良則)では、インドネシア・西ジャワのタケを利用した焼畑と、日本における石垣や被覆植物を用いた段畑および生垣や畑の境木として利用される植物がつくってきた景観を事例に、多様な植物利用を内包した畑地景観のつくり方とつかい方が報告されている。これらの事例から筆者は、「風景に埋め込まれた技術や文化、その当時の人びとの価値観」(p.31)を総体的に掘り起こし、「そうした情報の蓄積によって、人—環境系に関する知の体系化ができる」(p.31)ことを指摘した。

「第2章 人とザンジバルアカコロブスの関係を考える—国立公園の設置をめぐる」(野田健太郎)は、タンザニアのザンジバル諸島に生息するサンジバルアカコロブスが、民家のかまどの炭を食べるという不思議な話から始まる。ここでは約20年前に国立公園

がつくられ、コロブスザルは観光資源として利用されている。一方、公園の設置をきっかけに人とコロブスザルの均衡関係は崩れ、コロブスザルは屋敷林内で以前と異なる新たな樹種を食べるようになった。コロブスザルが炭を食べるようになったのは、この植物が引き起こす体調不調を改善するため、つまり人工林をつかい生きていくために、習得した術だと筆者は推察している。

「第3章 出作りによる乾燥林の焼畑—マダガスカル南西部における無主地の利用」(安高雄治)は、マダガスカルの半乾燥地帯で出作り耕作をおこなう人びとを対象に、かれらの焼畑の実態について論じている。人びとは、沿岸部に位置する居住村から離れた内陸地域で、出作りによる焼畑をおこなっている。その背景には、人口増加による土地不足と慢性的な旱魃、さらに自然保護の規制強化がある。筆者は、出作り耕作は、耕作時期と労力の面において村での常畑と両立可能であり、さらに沿岸部より降水量が多く広い面積を利用できるため、生計維持の不足分を補える可能性があり、都合がいいという。しかし一方で、自然保護と人びとの生計維持の両立は難しいことから、今後の状況を憂慮している。

「第4章 雑草の資源化—ボルガバスケット産業における材料の転換」(牛久晴香)は、第Ⅱ部「置き換える」にもっともふさわしい章だ。ガーナ北東部でつくられるバスケットの材料が、周辺の河畔に自生するイネ科のベチバーグラスから、同国南部に自生するギニアグラスへと置き換わったという事例であ

る。ダム建設、食料不足、経済危機とその復興といった1980年代に「偶然」にも近接しておこったできごとが、ガーナ南部の畑に大繁殖したギニアグラスを、北部でつくられるバスケットの材料として「資源化」することにつながった。そして、ギニアグラスはバスケットの「本物」の材料へと置き換わった。「資源が『置き換わる』」というできごとは、環境と人との関係を動的にとらえるための切り口になる」(p. 129) ことを示した。

「第5章 つかい、つくられるラオスの在来野菜」(小坂康之)は、ラオスの市場に並ぶ多種多様な野菜が、どのようにつかい、つくられるのかを論じたものだ。ラオスの人びとは、実に多様な野菜を食べる。そして、それらの多くは在来野菜であり、野生植物であり、人びとは野山から採集するだけでなく、ホームガーデンや農地に移植して育てているという。「野生植物はもともと生育していた環境の改変によって消滅していくと思われたが、逆にホームガーデンで育てるようになったことで、これまで以上に身近な野菜になっているものもある」(p. 159)。そうして人びとは「生きた文化財」として在来野菜をつくり、つかっているということが詳細に報告された。

「第6章 新しい生態系をつくる」(伊谷樹一)は、生物多様性保全において、たいいてい「厄介者」として扱われる外来樹種をつかい、人びとが新しい生態系をつくるという事例である。地域の生態系にとっては脅威だと考えられてきた外来樹種が、近年、実は知る人ぞ知る良材であることがわかり、貴重な資源だ

とみなされるようになったという、外来樹種を見直す事例が示された。筆者は「生態系にある程度は生物の効率性や経済性を取り入れる必要がある」(p. 196)として、外来種を一様に排除するのではなく、「むしろその種についての知識を深めながら、資源として取り込み蓄積していけるような生態系をつくっていかねければ」(p. 197)と論じた。

「第7章『つくる』と『つかう』の循環をうみだす—タンザニアにおける粃殻コンロの開発実践をとおして」(平野亮)は、筆者がタンザニアの職人たちと粃殻を完全燃焼できるコンロをつくり販売した、実践的な研究である。筆者は、稲作の普及に伴い廃棄物としての粃殻が大量に排出される一方で、燃料不足が深刻であるという背景から粃殻コンロに着目したが、実践するなかで「つくる」と「つかう」ことが必ずしもうまく連動するわけではないことを知る。そして、「つくる側」の技術と「つかう側」のニーズや能力、慣習が相互に影響をおよぼし合いながら、ひとつの「技術」が練り上げられるが、そのためには両者のあいだの仲介役が重要であることを示した。

「第8章 食文化を支える再生可能燃料—ウガンダ・首都カンパラにおけるバナナの調理方法とバイオマス・ブリケットの活用から」(浅田静香)は、ウガンダ南部地域において、マトケという伝統的なバナナ料理と、その調理に用いる燃料に着目している。マトケの調理には長い時間と手間と、十分な量の燃料が必要だが、7章のタンザニアと同様にウガンダでも木炭は慢性的な供給量不足により常に

値上がりしている。そこで近年、都市内部で発生する食物残渣を原料にバイオマス・ブリケットがつくられるようになった。人びとは木炭や薪とブリケットを組み合わせ、調理の工程に合わせて熱電源を切り替えながら効率よく調理をする。筆者は、都市部の廃棄物を原料とするブリケットを取り入れた食文化は、「世界に先駆けて、都市における有機物の循環的な利用」(p. 255)であると評価している。

「第9章 消えない炭と林の関係」(多良竜太郎)は、タンザニアにおける木炭の生産と利用を、多角的に分析したものである。煮込み料理が多いというタンザニアの料理の特徴を踏まえると、途中で火力が弱まらずに放っておける、火持ちのよい木炭になる樹種が、炭焼きに「適する」と考えられている。一方で、林にはかれらが木炭には「適さない」と考える樹種も存在しており、それらが伐り残されることで、山林の被覆が失われずに木々がスムーズに再生し、長年にわたる炭焼きを可能にしてきたという。筆者はかれらがおこなう炭焼き方法には、「繊細で奥深い知識と技術が内包されている」(p. 287)と評価し、この知識や技術が、環境保全とエネルギー供給という矛盾した課題に対する解決の糸口になるかもしれないと期待している。

「終章 資源をつかう、つくる」(伊谷樹一)では、各章の要約をしながら、現代的な自然と人のかかわり方とその魅力についてまとめられている。

本書は「生態環境を巧みにつかいこなすための知識や技術」(p. 301)に着目しながら

も、すべての論攷に「資源の枯渇」に関する表現が出てくると編者は指摘する(p. 301)。とはいえ本書で示されたのは、不足する資源を際限なくつかい果たす人びとの姿ではなく、既存の知識や技術を基盤に据えながら、在来の資源や利用法だけにこだわることなく、新たな「つかう」や「つくる」を生み出す人びとの姿であった。評者は滋賀県でトチ餅(トチノミとモチ米を混ぜて搗いた餅)をつくる人びとが、高齢化やトチ餅の商品化、シカによる食害といった影響を受けて、トチノミを地域外から購入し餅づくりを続ける事例を報告したことがある[八塚・藤岡 2015]。原料が外部調達されることは一見すると地域のなかの自然資源と住民のつながりが切れたようにみえる。しかし、トチ餅づくりは、地域の資源を長年利用してきた経験とその過程で培われた資源利用の技術があるからこそ成立している。本書に収められている論攷も同様に、「現代的な課題に直面しながら、自然界の資源を使っていかにそれを克服しようとしていくかを問う」(p. 294)ものであった。それは「自然に密着して生きる人びとの生きざまの研究を目指したとき、やがて明らかになる自然と社会との齟齬の問題」[寺嶋 2017: 530]に真摯に向き合ってきた研究の成果であるからだろう。

本書の各章はとても興味深くおもしろかった。しかし1冊を通して読むと、どうしてもテーマや地域の偏りが気になる。せっかくなので、生物資源に限定せずに、さまざまな「つくる・つかう」を読みたいと欲が出てきたことを、最後に申し添えたい。

引 用 文 献

- 寺嶋秀明. 2017. 「解題—掛谷誠の生態人類学, そのまぶしくもやさしい肖像」『掛谷誠著作集 第1巻 人と自然の生態学』京都大学学術出版会.
- 八塚春名・藤岡悠一郎. 2015. 「山村の特産品づくりを支える資源利用ネットワーク—滋賀県高島市朽木におけるトチ餅生産とトチノミ利用」『BIOSTORY』24: 94-106.

鈴木 董. 『オスマン帝国の世界秩序と外交』名古屋大学出版会, 2023 年, 272 + 43 p.

松井真子 *

本書の著者が、日本におけるオスマン史研究を牽引してきたことに異論はないであろう。オスマン語の一次史料利用どころか、それを収集するためのトルコへの渡航自体が未だめづらしかった時代にイスタンブールに留学し、オスマン史のみならずその東西世界との比較や法学的理論との関係など幅広い視野で研究を進める一方、東京大学東洋文化研究所を拠点に後進の育成をつづけ、その薫陶を受けた門下生たちが今や国際的に活躍している。

著者の研究関心はオスマン史関連だけに絞っても幅広いが、あとがきにあるとおり、それは次の4点に集約される。

- ①アラビア文字世界としてのイスラム世界の
世界帝國的な存在であったオスマン帝国の
世界秩序観と諸政治体との関係の現実

- ②文化的多元社会であったオスマン社会の統
合と共存システムとそれを支えたアイデン
ティティの構造
- ③政治体としてのオスマン帝国を支えた支配
組織とその中核を担った支配エリートの特
色
- ④食文化から文学に至るオスマン文化の諸相

本書は主に①の分野を取り扱ったものである。著者は、このオスマン帝国の国際関係を論じる枠組みとしての比較文明史こそが研究の出発点であったとふりかえる。その捉え方について著者は「文字世界」という独自の概念を提唱し、それは本書でも採用されている。さらにオスマン帝国の比較対象として日本と中国を挙げ、その3点比較（試論として第5章と第9章）に今後本格的に取り組むとの表明がなされており、著者によるさらなる研究成果が待たれる。

本書の構成は以下のとおりである。

序章 イスラム的世界帝国としてのオスマン帝国

第一部 オスマン帝国の世界秩序

第1章 イスラム世界の「内」と「外」 —境界・言語・移動

第2章 オスマン帝国の異文化集団支配

第3章 イスラム国際法とオスマン帝国 の外交

第4章 オスマン帝国の世界秩序観と国 際関係の変容

第5章 オスマン帝国の対外交渉行動

第二部 オスマン帝国と近代西欧国際体系

* 愛知学院大学文学部